ＩＳ　裏方の赤い人

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　裏方の赤い人

【Ｎコード】
Ｎ１２９０Ｙ

【作者名】
ネコ削ぎ

【あらすじ】
世界をまたいで願いをかなえるなんて出来ませんよ。代わりに私の居る世界の人達の願いをかなえてあげましょう。色々なところにいますから声をかけてください。願いをかなえたら退散しますから。ちなみに目印は赤色ですから。

注意……この作品はいまだに迷走中の中で執筆したので、場合によっては更新されない可能性があります。

こうして皆が壊れてく（前書き）

場合によっては更新されないかもしれません。評価＋個人的な気持ちでがんばりますが。

こうして皆が壊れてく

ぼく達はとても仲が良かった。
とてもとても仲が良かった。
本当に仲が良かった。
仲が良かったんだ。
だからだろう。
今日も仲良く遊んだんだから、明日も今日と変わらず仲良く遊ぶんだろうと。
当たり前のように、疑問などある訳もなくそう思った。
実際に明日も、そのまた明日も仲良く遊んだ。
当たり前のように、明日もそうなることを疑わずに。

「トーカ、箒。行こうぜ」

そう言って目の前で……ぼくが轢かれた。
こう、ポーンと。
本当はもっと鈍い音が響き渡った気がする。
世界が止まったような錯覚を覚えた。周りの人達はちゃんと動いていたが。
けたたましい悲鳴がぼくの耳に飛び込んできた。
隣にいた友達にも聞こえたのか驚いて尻餅をついて、泣き出してしまう。
視線の先にある動かなくなった人を見て、ぼくは半身を失ったのだと分かった。
夏のある日のことだった。

織斑十夏（おりむらとおか）は双子の兄である織斑一夏を目の前で亡くした。飲酒運転

の軽自動車に轢かれた。一夏の体重を感じさせないくらい簡単に。
病院で制服姿のまま、お姉ちゃんはショックで崩れ落ちた。
後は淡々と進んだ。何があったのか分からないほど淡々に。
全てが終わった後なのに、ぼくの家は暗かった。何日も何日も。天気が良くても暗かった。
ぼくもお姉ちゃんも学校を休んで家にいたので、その暗さがぼく達二人が原因だと気づくのはそう遅くなかった。
このまま家にいるのが辛くなって家を出て、近くの公園でずっと時間を潰していた。
どうすればお姉ちゃんが笑顔になるのか？　一夏が戻ってくれば笑顔になるのか？
同じことを延々と考えて、ふと顔を上げると赤色が目の前に広がっていた。
赤色はぼくの目線に合わせるためにしゃがみこんで微笑む。

……赤い女の人だ。

首が隠れる程度に伸ばされた髪は真っ赤。ぼくを見つめるその瞳も赤い。日本人ではない褐色の肌。修道服を着ているが、それも赤色。
そんな赤い人はぼくを穴が開くほど見つめている。
ぼくはどうすれば良いのか分からず固まってしまった。

「君さ……」

沈黙を破ったのは赤い人だった。

「何か困ったことあるでしょう？」

何処までも明るいと思える声色。
ぼくの家の暗さとは大違いだ。

赤い人の声に、ぼくは事故で一夏を亡くしたことを話した。
全て話し終えても、赤い人は微笑んだままだった。

「私がさ、その一夏くんを生き返らすことが出来るって言ったらどうするかな？」

明らかに嘘をついているだろう。死んだ人を生き返らすことなんて出来るはずがないんだから。
ぼくの目が胡散臭いものを見る目だと気が付いたのか、赤い人はクスッと笑う。まあ、信じないよねと言いながら。

「でもね、私は人の願いをかなえることが出来る魔法使いだから。実は出来ちゃうんだよなー」

魔法使いと言う言葉でぼくが納得すると思っているのだろうか？
ぼくが納得していないのを知っているか分からないが、赤い人は公園内に植えてある枯れた桜の木に向かっていった。その木の前にたどり着くと、両の手のひらをくっつける。

「枯れ木に花を咲かせましょう」

その言葉が発せられると、木は応えるように桜の花を咲かせ始めた。
あり得ない光景にまるで花咲爺さんみたいだと思ってしまった。そして、本当に魔法使いだとも思った。

「凄いでしょう。信じる気になった？」

咲き誇る桜の木から離れて戻ってきた赤い人は変わらず微笑みを浮かべていた。
季節はずれの桜の存在に、ぼくは赤い人が本当に願いをかなえてく

れると信じた。

「本当に一夏を生き返らしてくれるの？」

もしぼくが大人なら手品か何かだと鼻で笑い信じなかっただろう。子供だから信じてしまった。

「ふふふ。やってあげましょう。その代わり――」

「その代わり？」

「きみの命を貰うけど良いかな？」

――え？

「一人の人間を生き返らせるんだから、これくらいの対価は貰わなくちゃね」

ぼくのいのち？

「ただで願いをかなえてくれると思った？　だとしたら甘い。ちゃんと対価はいただきますよ。その証拠にさ」

赤い人が先ほどの桜を指差す。

少し前まで咲き誇っていた桜が見る見る内に花びらがなくなっていき、枯れていく。

「すぐに咲かせてあげたから、すぐに枯れてもらったんだ。きみの場合は一夏くんを生き返らせる代わりに、きみの命をいただくってことで……どうする？」

ぼくの回答を赤い人はずっと微笑んで待っていた。
初めて、笑顔が怖いと感じた。とても怖いのだと。
気づいたらぼくは赤い人から逃げ出していた。

こうして皆が壊れてく2

目の前には鏡がある。とても大きな鏡。ぼくの体が全部映るほどの鏡だ。
ぼくが手を上げれば、鏡に映るぼくも同じタイミングで手を上げる。
笑えば笑う。怒れば怒る。泣けば泣く。
面白いと思えるほどに一緒に動く。

まるで双子みたいだ。

……双子？

ぼくは一夏と双子。見た目は同じ。初めて見た人はどっちがどっちか分からないほどに。
鏡に映るぼくは相変わらずぼくと同じ動きをする。
自分の動きを映し出す鏡に飽きてきた頃、不思議なことが起こった。
ぼくが何の動作をしていないのに、鏡に映るぼくが急に泣き出したのだ。
ゾッとしてしまった。
しばらく泣いたぼくは、今度は口をパクパク動かし始めた。音が聞こえず何を言っているのかはまったく理解が出来ない。

パクパクパクパク。

パクパクパクパク。

鏡に映るぼくは一体何を伝えようとしているんだろう？

「何を言いたいの？」

言って後悔する。鏡に語りかけるなんて変だ。いくら鏡に映るぼくが勝手に動くからといって、話し合えることはないんだ。
ぼくは鏡に背を向けて立ち去ろうとする。

「…ど……いき……」

何処かから途切れ途切れの声が聞こえてくる。聞いたことのある声だ。

「どうし……いき……なかった……」

先ほどより言葉を聞き取ることが出来た。何処から聞こえてくるかも。
目の前の鏡だ。鏡に映るぼくが喋っているんだ。

「どうして、俺を生き返らせてくれなかったんだよ」

聞いたことのある声。ぼくの声だ。同時に一夏の声である。鏡に映る人物もぼくであって一夏でもある。

「どうして、願いをかなえてもらわなかったんだよ?」

一夏がぼくに語りかけてくる。あの日、ぼくが赤い人から逃げ出したのを責めてくる。

「かなえてもらおうとしたよ!!」

かなえてもらおうとしたんだ。でも、代わりにぼくの命を貰うなんて言ってきたんだ。

「違う。逃げたんだよ、お前は。家族の俺を見捨てたんだ。千冬姉が泣いているのを止めようとしなかったんだ。トーカ、お前が自分の命をあげていれば俺も千冬姉も笑うことが出来るんだぞ」

ぼくは一夏を見捨てた訳じゃない！！　千冬お姉ちゃんが泣いているのを止めようとした！！

「なら、生き返らせろ。命を渡すんだ」

今度こそ鏡に背を向けて逃げようとする。
しかし、振り向いた先にはぼくを、一夏を映し出す鏡が存在した。
右を見ても、左を見ても、上を見ても下を見ても、ぼくを映し出す鏡があった。

「生き返らせろ生き返らせろ生き返らせろ生き返らせろイキ返らせロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロ」

ぼくを囲む全ての鏡から際限もなく声が聞こえてくる。ぼくを責めるように。
騒音に混じり、すすり泣く音も聞こえ始めた。

助けて、助けてください！！

ぼくの叫びは騒音の中に空しく消えていった。

助けて！！　助けて！！　助けて！！

何度も何度も叫ぶ。鏡に映る一夏から逃げ出したくて。

目を開ければ見慣れた空間にいた。ぼくと一夏に与えられた部屋だ。
なんてことのないぼく達の部屋。空間を彩る装飾品の類も年相応の玩具もない質素な部屋。
そんな部屋の片隅でぼくは眠りから目覚めたんだ。
換気のなされていない部屋は淀んだ空気に満ちていて、具合が悪くなりそうだ。
開けられていないカーテンが昼夜を問わずぼくを外の世界から遮断してくれる。
そのカーテンに日の光が当たっているから、まだ夜じゃないんだ。
みんな学校で何をしているんだろう？
最近、学校に行っていないから今何を学んでいるかも分からない。
箒ちゃんがプリントを持ってきてくれるけど、目を通したことがないからそこから何を学んでいるかも分からない。
赤い人から逃げ出した日から、ぼくは学校を休みがちになった。
周りがぼくを責めている気がするんだ。

どうして、一夏を生き返らせなかったんだって。
クラスのみんなと親しかった一夏の代わりにぼくが死ねば良かったんだって。

気づけば少しずつ登校を拒否するようになって、最終的に引きこもってしまった。
一日中自室で睡眠をとる毎日。寝れば夢を見て、それで目を覚ます。
十分な睡眠がとれていないのでまた寝て、また目を覚ますの繰り返し。

――どうでも良い。もうひと眠りしよう。

こうして皆が壊れてく3

起きては寝て、起きては寝て。
寝れば嫌な夢を見ることは明白なのに。
でも学校に行こうとは思わない。
行けばみんなが責めてくるから。
直接責められたことはないけど、きっとみんなはぼくを責める。
起きてすぐに寝てまたすぐ起きる。
長く起きているのはお腹が減った時とトイレに行く時。

まだそんなに経った訳じゃないのに、お姉ちゃんの顔が思い出せなくなった。名前は思い出せるのに。織斑千冬と言う名前だと。

……どうでも良いか。

そういえば、いまだに箒ちゃんがプリントを届けてくれるらしい。
少し嬉しいけど、それで嫌な夢を見なくなるわけじゃないから。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。
時計を見るとまだ一時間しか経ってない。
やっぱり変わらず嫌な夢だ。
どうにかしてあんな夢を見なくてすむ方法はないのかな？　もしくはいちいち夢に脅えない様にならないかな。
段々と涼しくなってきた。寝汗をあまりかかなくなってきたので起きた時の不快感が一つ減った。
世の中は夏から秋に変わったんだろう。

ぼくはずっと一夏に囚われてるのに。
どうにかならないのかな？

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。
時計を見るとまだ一時間しか経っていない。
何度見ても嫌な夢だ。
いい加減にこの夢を見なくてすめば良いのに。
高い所から飛び降りればもう夢を見ないですむのかな？　それとも永遠に夢を見続ける結果になるのかな？
そういえば最近、家から気配がしなくなってきた。お姉ちゃんが帰ってくるのが遅くなった気がする。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。
時計を見るとまだ一時間しか経っていない。
もう……こんな夢は嫌だ。
いい加減にいい加減にいい加減にしてほしい。もう過ぎたことなんだ。いつまでも夢に出てきて。そういうふうになっちゃったんだから。諦めてよ。ぼくも酷い目にあっているんだから。
ああ！！

……どうでも良いか。寝るしかないんだから。

……また起きる。
暖かい何かがぼくの頭を撫でてる。優しい手つきだと思う。
確実にお姉ちゃんの手じゃない。だって、お姉ちゃんは現実でも夢の中でもぼくを助けてはくれないから。
だったらこの手は誰だろう？
パチっと目を開けると、視界一杯に赤色が飛び込んできた。

「おはよう。不法侵入については勘弁してね」

あの時、公園で出会った赤い人がぼくの顔を覗き込みながら頭を撫でていた。
久しぶりに見たけど赤い。
あかあかあか、全てが赤い。
赤い髪に赤い瞳、赤い修道服。肌は褐色で日本人ではないだろう。

「……なんで？」

無意識の内に出てきた言葉。

「なんで？　あぁ、それはね。きみの願いをかなえてあげるために来たんだよ」

願いをかなえる？　また一夏を生き返らせる願いを。

「かなえてほしい願いを言ってごらん。限界はあるけど、私のかなえられる願いなら一つだけかなえてあげるよ」

とても明るい笑顔をぼくに向けてくる赤い人の声も相変わらず明る

いものだった。
怖いと思うけど、同時に嬉しくも思う。
まだ、ぼくを気にかけてくれる人がいるんだ。

「なんでも良いの？」

一夏のことじゃなくても？

「なんでも良いよ」

「なんでも良いの？」

「なんでも良いよ」

「じゃあ……」

この願いをかなえてほしい。もう嫌だから。

出会いに感動などありはせず1

時間が経つのはとても早く、記憶に残らないくらいに薄っぺら。
いつの間にか高校への進学を果たしていた。

あの時とは違い、教室の中がとても静かだ。
教室の外の様々な音が鮮明に聞こえるくらい。
がやがやと騒がしいよりは静かな方が良い。

何をするでもなく、ただ前を向いている俺の視界に入るのは少し子供っぽい先生。
眼鏡とオドオドした感じで教師に向いてはいないだろう。あくまで表面を見ただけなのでまだ断定は出来ないが。
その先生はこの空間に充満している空気にどうすれば良いのか判断がつかないようだ。
きっと今までの新入生の感覚とは違うのだろう。この先生が新任の教師でないのならだが。

「そ、それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

意を決した先生はニコっと笑ってから口を開く。その笑顔で発した言葉は典型的な内容のものであった。
別に過激な発言やオリジナリティーを求めている訳ではないから典型でも構わない。典型的なものは緊張した雰囲気であっても接しやすいものだから。
問題は先生の挨拶に対して誰もアクションを起こさないことだ。恥ずかしいのなら仕方がないが。
おかげで先生はうろたえてしまった。
俺個人に挨拶した訳ではないが、軽く会釈を返す。頷いただけだが。

俺だけ反応したのが目に入ったらしく、先生はなんとか持ち直した。
先生はクラスの一人一人に自己紹介をさせ始めた。
入学早々にクラスの名前を知る機会が与えられたのだ。
周りが次々に自己紹介をしていく中、俺は何もせずに前だけを見ていた。
ふと、教壇に立っている先生と視線が重なった。

「あ、えっと。次は織斑くんの番ですよ」

どうやら自己紹介の順番が回ってきたから此方を見たようだ。
自分が座っている席から立ち上がり、後ろを振り向く。
視線が自分に集まっているのを理解した。
視線の理由は簡単だ。俺の存在がこの学園において異質なものであるから。
俺が入学した学校。名前をＩＳ学園と言う。ＩＳと言う兵器の全てを教える教育機関。ＩＳは原則女性しか動かせない。
俺が此処にいることが珍しいということだ。

……どうでも良いか。

自己紹介をする前に、一度教室内の人間の顔を見渡していく。
赤色、金色、黒色、赤色、茶色と様々な髪の色をした人間が興味津々と言った具合でこちらを注目している。
窓側の席に視線を動かすと、知っている顔が此方を見ていることに気がついた。
知っている顔の篠ノ之箒は俺をジッと見ている。
ひとまず視線を外して、自己紹介を始める。

「……織斑十夏です」

言い終わると前を向いて着席。
後ろの方から呆ける声が聞こえ、次に不満の声が続く。
別に自身の様々なことを紹介したいと思っていないのだから長々話す意味もないだろう。それに個人個人に任されているのだから、どの長さで止めるかを非難さても困る。
いまだに納得していない面々はいるが、次の紹介者が立ち上がったので終わる。
またもや何もせずに正面を向いていると、教室に誰かが入ってくるのが視界に入った。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスの挨拶を押し付けてすまなかったな」

入ってきたのは織斑千冬。

「諸君、私が織斑千冬だ」

織斑先生が自己紹介をする。
――一瞬の沈黙の後、黄色い声援が教室内に響き渡る。

「きゃー！！本物の千冬様！！」

「ずっとファンでした！！」

隣の教室の迷惑になっていないのか？
織斑先生を見ると、少し嫌そうな表情をしていた。

「全員、落ち着け。お前達はこれからＩＳの基本知識や動作を死に物狂いで覚えてもらうからな。覚悟しておけ」

アイドルみたいな存在がこのクラスの担任なのか。いちいちうるさいことになるのが容易に分かるな。

休み時間になると、他のクラスの学生が廊下の方から此方を覗きこんで来ていた。
別に気にすることはないので、俺は自分の席から離れずに休憩している。
そうすると、俺の席に近づいてくる人物がいた。

「久しぶりだな、十夏」

箒が俺の前に立って挨拶してきた。
俺の名前を呼ぶ時に少しだけ嬉しそうな表情を浮かべた気がする。

「……久しぶり」

お互いにそれ以上何かを語ることはしない。ただ、黙っているだけだ。
周りで聞き耳を立てている女子達を気にしている訳ではない。箒がどう考えているかは知らないが、俺は再会に言葉は不要だと思っている。純粋に再会を感じれば良いと。無駄にべたべたする必要はない。
箒はずっと俺のことを見るだけ、俺は箒を見るだけで僅かな休み時間が終了した。

出会いに感動などありはせず2

何も語らずに座っているだけ。
だから授業の合間にある小休憩の度にクラスの生徒や違うクラスの生徒が俺を眺めているのには時間の無駄だと言いたい。
別に何をしている訳ではないのだ。何処に興味を引かれると言うのだろうか？
俺に向けられる視線が時折外れて、隣にいる箒へと注がれる。
そんな視線など気にも留めない箒は俺の席の隣で立っているだけ。
相変わらず俺も箒も口を開くことはしない。
この状況を見た女子生徒達は俺と箒の仲があまりよろしくないのだろうと推測しているらしい。
別に仲がよろしくない訳ではない。ただ、話をしていないだけ。
おそらく、時間に余裕があるんだ。
わざわざこんな少ない時間で意味のない話をすることや、授業中に教師に目を盗んでこそこそとやり取りをしなければならないほどに濃密な時間を過ごそうなど思っていないんだ。

知り合いと沈黙のまま空間を共有できることは幸運なことだ。
小さな幸せとはこういう他愛もないことを言うんだな。
だからこそ、この空気も読めない不届き者が現れたことに興が削がれてしまうのだろう。

「ちょっと、よろしくて？」

空気を引き裂いて現れたのは、白人の女性。金髪で優雅な物腰が育ちの良さを表している。
何故、話しかけてきたのかは知らないが、隣にいる箒が一瞬顔を歪めた。先ほどまでの空気が霧散してしまったからか。

「聞いてますの？　お返事は？」

何事かと周りの見物人が遠巻きに眺めている。あくまでも傍観者を決め込んでいるらしく、誰一人として近づく気配はない。

「お返事も返さないなんて、どういうつもりですの？　わたくしに話しかけられるだけでも光栄なことなのですから、相応の態度というものがあるんではないでしょうか？」

芝居がかった人を小馬鹿にするような態度。わざとらしくて何を言えば良いものか？

俺が沈黙を保っているものだから、目の前の白人女性は勝手に話し続ける。

「わたくしに話しかけられて驚いているのでしたら仕方がありませんね。何せ、わたくしはイギリスの代表候補生にして入試主席でもあるセシリア・オルコットですから」

どうやら自慢がしたいだけのようだ。わざわざ構う必要などない。目の前にいる人物を風景の一つに認識を変更して自分の中に穏やかな時間を作り出す。

ふと窓側に目をやると太陽の光は差し込んでいて、無機質な空間の一部が違ったものに変わっている様に感じた。

どうせなら窓側の席が良かった。夏は暑く、冬は寒く感じることが出来るのが羨ましい。

席替えはあるのだろうか？

「い、いい加減にわたくしの話を――」

教室に響く続ける騒音がチャイムにかき消された。
ああ、次の授業が始まるみたいだ。
机の中から教科書を取り出し始める。どれも分厚い書物でかさばることこの上ない。無駄な部分を省くべきではないだろうか。

「くっ！！　また来ますわ。逃げないことね！！」

勝手に来ておいて勝手に去っていったセシリア。友達がいるのかが気になる。
俺が気にすることではないな。

「十夏、また来るぞ」

箒の方はしっかりと断りを入れてから去る。
千差万別と言うのだろうか？　それとも十人十色と言うべきか？

日本語の難しさを考えていると教師が入ってきて授業の開始を告げた。
教壇に立つのは一、二時間目とは違い織斑先生が担当するようだ。
昔から鋭い雰囲気を醸し出している。
刀と言えば満足するだろう。
正面以外がとても打たれ弱い刀。
折ろうと思えば簡単に折れる刀。

「この時間は各種武装の特性について説明するのだが、そのまえに再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦の代表を決める。
それなら、先ほど五月蝿く自慢を垂れ流していたあの女に任せておけば良い。適任だろう。

しかし、祭り上げられるのは織斑十夏と言うもの珍しいだけの自分。ブリュンヒルデなんて大層な名前の称号を持つ人物の弟でしかない自分。
死んだ双子の兄の劣化コピーでしかない自分。
いかに自身を低く見ようが、周りは自分勝手な評価を押し付けてくる。俺自身も自分勝手な評価を自身につけているのだが。

「候補者は織斑十夏。他にはいないか？」

織斑先生が新たな候補者の有無を問いかけてくるが、誰も言葉を発しようとはしない。
適当に祭り上げやすそうな人物を一人挙げれば良いのだ。無責任な推薦である。大概の学び舎で行われている分かりやすい無責任。
選ぶ方は無責任に選ぶのだが、選ばれた方はどのような言葉を並べて反論しようとも関係なく責任を背負わされる。無責任が責任を押し付ける。

「他にいないのなら織斑に決定する」

どうやら責任を押し付けられる立場になってしまったらしい。
残念なことだ。仕方のないことだろう。こんな面倒事をやりたがるのはよほどの向上心を持った奴だけだ。
そんなことを思っていると突如、机を力強く叩く音が教室に響き渡る。

「待ってください。納得がいきませんわ！！」

誰の訴えだろうか？　後ろを振り返る気がないので、声だけで判別しなければならない。

数分前に聴いたような声だ。きっとあの女なのだろう。

「そのような男を代表にするなど認められません。わたくしの方が実力があります。珍しいと言うだけで、そのような極東の猿にされてしまったらいい恥晒しですわ！！」

よくもまあそのような言葉の数々を吐き出すことが出来るのだと思うくらいに一人で喋り続ける。
織斑先生も止める気がないのか好き勝手させている。

「――ちょっとあなた、聞いていますの！？」

先ほどからの言葉の羅列はどうやら俺に聞かせるためのものであったらしい。てっきりクラス中に自身の有能さを伝えたいが故に俺を標的にしていたのだと思っていた。

「お返事ぐらいしなさい！！」

高圧的な態度とはこのことを言うのだろう。暴力に訴えないことが唯一の救いだ。そのうち手を出してくる可能性がない訳ではないだろうが。

「くっ！！」

後ろから授業中だというのに足音が聞こえ、近づいてくる。
踏み鳴らしながら近づいてくる人物は自らの感情を隠すことをしていないようだ。
その人物はわざわざ俺の前まで来る。
織斑先生からの視線を遮るように立つセシリア。
顔は怒りに染まっていて瞳もまた怒りを宿している。

「決闘ですわ！！」

指を差して宣言してくるセシリア・オルコット。
その宣言を認めてすぐに予定を決める織斑千冬。
無断の宣言に両者を鋭く睨みつける篠ノ之箒。
投げかけられた宣言に何も思わない織斑十夏。

――どうでも良いか。

出会いに感動などありはせず3

生まれてから二十歳までの体感時間と二十歳から死ぬまでの体感時間は同じだと言うことがあるのだが、この歳になって時間の流れが早いと感じてしまうとはいかがなものか？
本日の全ての授業が終了した。初日なのでけっこうバタバタしたものと思っていたのだが、案外そうでもないらしい。
今日使った教科書やノートといった勉強道具と総称することが出来る物を鞄の中に無造作に突っ込む。
周りを見渡せば、放課後だけあってそこそこの数の生徒達が教室に残っている。今日の出来事や思ったことについて話しあっている。
俺は別に教室で何かしたいということもないので、鞄を持って教室から出る。
向かうは自宅。
原則としてこの学園の生徒達は寮生活である。
理由はあまり知らない。登校する時間とかを削減して授業時間に当てるとかだろう。熱心過ぎる教育方針だ。あまりの熱さに蒸発していなくなりたいくらいに。
しかし俺は寮への入居を拒否された。部屋割りが決まっていないから一週間は自宅からの登校になると。
残念だとは思わない。自宅の方が他人の目を気にしないで好き勝ってができるのだから。

廊下を何の感慨もなく歩く。
この学園を希望して死に物狂いで入学した訳ではないので、何も感じる気にならないのだろう。
そこらでグループを作って歩く生徒達を避けたりしながら歩く。
学園内を見て回るほどの関心もないので歩みを止めることもない。
内履きから通学用の靴に履き替えて、校舎の外へと進む。

自宅までの道のりは正常な世界に戻ってきたことを感じさせてくれる。
男性がいて女性がいる。
男の子がいて女の子がいる。
老爺がいて老婆がいる。
一方しか存在しない狂った空間ではない世界。

慣れ親しんだ家にたどり着いた時、冷蔵庫に食材が入っているのかが気になった。
気になったが、家に入ってから確認すれば良い。わざわざ此処で悩む必要はない。
家に入ろうと鍵穴に鍵を差し込もうとする。
スッと後ろから伸びてきた手に掴まれて、鍵穴まで手を伸ばすことが出来なくなった。
はて？　自宅の前で誘拐しようとした猛者なのか。

「お前の帰るところは此処じゃない」

掴まれていた腕が開放されたので後ろを振り向くと、視界に織斑先生が映りこんだ。
学園に寮入りを拒否されただけでなく、肉親に帰宅すら拒否されるとは。どうやら今日はホテルか何処かで一夜を過ごさなければいけないらしい。

「政府特例で寮に入ることが決まった。だから此処に帰ってくる必要はない。着替えと携帯電話の充電器は私の方で持ってきてある」

どうやら強制的に寮に入ることが決まったようだ。情報伝達が遅すぎる。今度は学園に行かなくてはならないのか。
良い運動になると思えば良いか。

「戻るぞ」

そう言って背を向ける織斑先生について行くと、自動車が止めてあった。
歩いて戻る気分でいたのだが仕方ないと助手席に乗ることにした。
ＩＳ学園までは自動車の方が徒歩よりも早く着いた。当たり前のことなのだが。
しかし、やはり簡素すぎて自動車は面白くない。ゆっくりと景色を楽しめる訳でも空気を感じる訳でもない。ただ、速くて体力を使わないだけ。
車内で織斑先生が何か話しかけてきたのだが、どれもハイかイイエで答えられるどうでも良いものしかなかった。
最後に学園内では織斑先生と呼ぶようにと釘を刺してきたのだが、端からそれ以外で呼ぶ気はないので意味のない注意だった。

織斑先生が鍵を手渡してきたので受け取る。織斑先生の表情が嬉しさのような後悔のような不思議なものになっていた。

自身に割り当てられた部屋まで行く。
鍵を開けて入室をする。
部屋の中にはベッドが二つ。そばに誰かの荷物。
明らかに相部屋である。
この学園に男子生徒は俺しかいないので確実に女子とのであろう。
この部屋の先住者は俺が来ることを知っているものか？　知らない場合は面倒事になってしまうことは明白。

一息つくために荷物をそこらに放りなげる。別に取り扱い注意の物が入っていないので。

「誰か……いるのか？」

荷物を投げた音が聴こえたのだろう。奥の方から声が聞こえてきた。扉に遮られているのが何処か聞き覚えのある声だ。

「同室の者か」

扉から出てきたのは箒。バスタオル一枚の。

「……」

お互いに視線が合う。

どうやら同室は箒らしい。良かったと思う。そこまで気兼ねする必要がない相手だ。

「同室になった織斑十夏だ」

親しき仲にも礼儀あり。幼馴染だからと言って挨拶を省いて良い理由にはならない。

「あ？　え！？　な、なん！！　ええ！？」

俺が此処にいることに驚いて上手く言葉に出来ていない。

自分の格好に気が付いたのか、段々と顔が赤くなっていく箒。

この事態に俺が出来ることは一つくらいだ。

「外で待ってるから終わったら呼んでくれ」

すぐに部屋を出て行くだけ。

部屋の外に出て数秒だろうか？　数分だろうか？　とにかく少ししてから部屋のドアが開いたので中に入る。

中には先ほどとは違い、寝巻き用の浴衣を着用していて、顔は平常に戻っていた。

「お前が私の同居人か」

「……らしい」

ふむふむと嬉しそうに頷く箒。すぐに真顔に戻るのだが。

俺は適当に入って奥のベッドに腰をおろす。

「お、お前から……希望したのか？」

「いいや」

そう答えると一瞬だけ悲しい表情を見せる。

「でも、箒と同室になったことは嫌じゃない。むしろ喜ぶべきことだろう。気兼ねなく過ごすことができるからな」

「そ、そうか。私も幼馴染の方が気兼ねなくいられるから良いぞ」

顔を赤らめて嬉しそうに語る箒は慣れた手つきでお茶を用意し始めた。

ポットに急須に茶葉。必要な道具を出すと二人分のお茶を淹れて、片方を差し出してきた。

熱いそれは心を和ませるには十分なものである。
一日の中でやっと落ち着いた空間を味わうことができたのだ。

小さな世界が砕けて散って1

知り合って暫く経つと、その姿を目で追っていた。
また暫く経つと、アイツに話しかける女子を快く思わなくなっていた。
また暫く経つと、アイツに対して少し正直でいられなくなった。

母親にそのことを聞くと、その子が好きなのねと言われた。
好き……？　確かにそうかもしれない。一緒に遊びたいし、一緒に剣道で腕を磨きあげたい。

アイツは剣道が駄目みたいで私どころか双子の兄にさえ勝てない。
同じ見た目をしているのにアイツは双子の兄みたいに強くない。
学校でアイツは双子の兄みたいに明るくない。別に暗い訳ではないが。
運動もアイツは双子の兄より下。
勉強もアイツは双子の兄より下だ。
クラスのみんなからは、劣化版と呼ばれている。
男ならやり返したらどうだと、一度焚きつけてみたが、アイツは涼しい顔で笑って、どうでも良いと言うだけだった。代わりに双子の兄が怒ったり喧嘩したりをしたが、アイツは困ったように笑うだけだった。

「どうでも良いか」

アイツの口癖。その言葉を聞くと私はアイツらしいなと思う。普通なら腑抜けと怒るところなのに。
見た目は同じ兄と弟だが、女子達は自然と兄に注目する。全てが弟に勝っている兄に。

しかし私はアイツのことばかり目で追ってしまう。本当に容姿は似ているのに何故だろうか？
いつも当たり前のように一緒にいられるものと思っていた。
しかし……何が起こるかは分からない。
双子の兄である織斑一夏が車に轢かれた。
私の日常が崩壊するきっかけの日。
それから何があったのか分からない。
ただ、織斑十夏の姿をずっと見ていたのは覚えている。
十夏は暫く学校に来なくなった。両親に聞いたら忌引きで休まざるを得ないそうで、すぐにまた学校に通うようになるらしい。だから十夏くんが来たら貴女が支えなさい、と母親に言われた。
最初は十夏を支えるの意味が分からなかった。
両親が言ったように、十夏が学校に来るようになった。
でも、前みたいな雰囲気はなくなってしまった。周りに対して怯えているんだ。
気づいたら十夏は段々と学校を休むようになってしまった。終いには学校にまったく来なくなった。
私は初めて母親の言っていることを理解できたのだ。だけど理解したのがあまりにも遅すぎた。
私は十夏に会いたくて学校のプリントを届けるのを引き受けた。
家まで着くと、十夏の姉である千冬さんに会うが、十夏に会うことなかった。
何度も十夏の家にプリントを届けにいっていると、気がついたこと

がある。
千冬さんの顔色が少し良くなってきたんだ。理由は分からない。
そういえば、最近姉さんが「ちーちゃんが構ってくれないんだよ」
って言っていた気がする。関係があるのだろうか。

一年が経ち、学校への期待で胸を膨らませた新入生が入ってきた頃。
何の前触れもなく十夏が登校してきた。
誰も声を出すことが出来ないくらいの衝撃。決められた登校時間を
大きく過ぎての登場に。
以前に見たときに比べて不健康そうな顔色。
無造作に切られた髪。
少し痩せてしまったその体躯。
少々印象が変わったように見えるが間違いなく十夏だ。

私の努力の賜物だ。
私の想いが十夏に届いた。
私が……十夏の心を救ったんだ。

それからの学校での時間は以前の様にとはいかないけど、とても楽
しいものになった。
十夏と一緒にいられる。一緒に学べる。一緒に楽しめる。
理由は定かではないが、十夏は表情を表すことがなくなったので最
初はどう感じているのかが判断出来なかった。しかし、共に時間を
過ごすうちに明確とまでいかないが分かるようになった。
私が十夏を想っているからこそ出来るようになった。姉である千冬
さんは十夏のことを理解出来ていない。
私だけが十夏のことを想っている。

そんな私にとっての幸せな時間はすぐに砕け散った。姉の造り出したＩＳと言う自己満足のせいで。全世界の崩壊と共に私の世界も崩壊させられた。
保護するだ何だで無理矢理住居を変えさせられ、行きたくもない学校に通わされて、帰ったら知らない無機質な大人達による尋問。篠ノ之博士の居場所を際限もなく尋ねてくる。
そんなことが続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いてツヅイテツヅイテツヅイテ――。

――気が付いたら赤い人が目の前に居た。
何処を見ても赤い。炎を連想させるような髪に真っ赤な瞳。褐色の肌が日本人ではないことを表している。修道服を着ていることが、それさえも赤い。
与えられた一室で膝を抱えて座っている私の視線に合わせるようにしゃがみこんでいる。

「君は何か願いを内に孕んでいるね。その願いをかなえてみない？」
微笑む赤い人の声は不思議と違和感なく耳に入ってくる。

「ね……が、い……？」

私の望み？　何を願う？
……十夏。
私は十夏を想いたい。私だけが十夏を想っているのだから。千冬さんでもクラスの奴ではない。私だけが十夏を想っているんだ。ずっとずっと昔から。好きなんだ。好きで好きでたまらないんだ。ただ、感情をそのまま表現することが出来ないだけであって。

「私は――」

――願いを言った。

小さな世界が砕けて散って2

いつもと変わらない日常が続くものだと思っていた。
元気に走り回る一夏にのんびりしている十夏。二人を守りながら生きていくのだと思っていた。
千冬姉お姉ちゃんと言いながら嬉しそうに学校のことを話す二人を眺めていくものと思っていた。
私の友人の妹に剣道で負けて悔しそうにする一夏とそれをのんきに眺める十夏に苦笑するのだと思っていた。
だから、こんな現実などは思っていなかった。
だから、こんな残酷なことは想像していなかった。

……一夏が事故で亡くなった。

何の冗談だろうかと、くだらなすぎると。
でもそれが、現実のものだと気づいた時、いつの間にか私は涙を流していた。
十夏がいる手前、何度も涙を止めようとしたが、涙腺が壊れてしまったかのように止まらない。

学校に復帰した時には、心も落ち着きを取り戻したのか、授業に遅れてしまったなと思った。
けれども、ふとした拍子に一夏の顔が浮かぶのだ。白く、まさに生気を感じない顔が。
気が付いたら、冷や汗が全身から吹きだしていた。もしかしたら十夏もああなってしまうのかも知れないと。
そんな私に気が付いたのか、篠ノ之束が軽い足取りで此方までやってくる。むかつくくらいの笑顔を携えて。

「大変だったね、ちーちゃん。いっくん居なくなっちゃって」

人の心を察することのできない私の友人。俗に言う天才であるコイツは周りに対してあまりに無関心だ。私と一夏、十夏、箒、かろうじて両親を認識できる程度の交流しかない。はっきりと駄目人間だと断言できる。

数日経って、十夏が段々学校を休むようになっていった。次第に家の中に居るのに顔を合わせることがなくなっていった。
怖くなったのだ。目の前で十夏の顔が生気のない白い色になっていくんじゃないかと。
休むようになった十夏を心配してか、箒が十夏の為に毎日学校のプリントを持ってくるようになった。
十夏を簡単に支えることが出来る箒に自分の心の弱さを思い知らされた気分になった。
そんな私を見かねた束が「ちーちゃんが元気になるように」と何かを発明し始めたが、嬉しいなどとは思わなかった。

家に帰ることに恐怖した私は出来る限り外で時間を潰すことが多くなった。
限界ぎりぎりまで竹刀を振るって現状を忘れようとした。
普段行かないような場所に足を延ばしてみた。
結局は自身の心の弱さを再認識する羽目になっただけで、何かが解決することはなかった。

遅くまで外に出ているので、もしかしたら警察の厄介になるかも知れないと夜の道を歩く。
――家に帰らなければならない。

街灯が点々と照らしている夜道を一人で歩く。
自分が鳴らす足音以外の音はまったくしない。世界に見放された気分になってしまうほどに。
注意力散漫になってしまっていたのだろう。
――人にぶつかってしまった。
「……すいません」
顔を俯かせたままの謝罪。心が篭っていないと言われてもおかしくない。
私の思った通り、ぶつかってしまった人はその場で止まってしまった。
「君は……何か悩みがあるんじゃないかな？」
この薄暗い夜道だと言うのにやけに明るい声だ。
「私が貴女の願いをかなえてあげようか？」
顔をあげるのも気だるいと言わんばかりの速度で目の前の人物に視線を合わせる。
――赤い人だ。
赤く染まった髪に真っ赤に光る瞳。外国の人なのだろう褐色の肌。
赤色の目立つ修道服を身に纏っていた。
新手の宗教勧誘か何かだろうか？
「私の願いをかなえる？」
違和感もなく耳に入ってくる声に私の思考は彼の人物について考え

ることを止めていた。
願いをかなえる。まるでシンデレラみたいな話だ。私がシンデレラ？　似合わない配役だと思うな。
「そう。簡単な願いであっても難しい願いであっても私のかなえられる範囲の願いなら一つだけ何でもかなえてあげるよ」
ソイツはこのうっすらと暗い世界に似合わない微笑みを浮べていた。
「私は――」
知らぬ間に願いを口にしていた。

十夏が再び学校に行くようになって、束がＩＳと呼ばれる兵器を開発して、私がそれで世界に衝撃を与えて、世界にＩＳが台頭した。
私はあの頃の弱い自分を恥じて、訓練に訓練を重ねていった。
十夏を守るために。自身の弱さを捨てて十夏を守るために。
気が付けば、最強の称号であるブリュンヒルデを手にしていた。
最強の称号……。やっと私は強くなったんだ。今なら十夏を守ることが出来る。
第二回モンド・グロッソにおいても代表に選ばれた私は大会に十夏を誘った。
「……興味ないからいい」
たったそれだけの言葉。たったそれだけの言葉に私は停止してしま

った。
な、なんで？
どうして？
こんなに努力をしたのに……なんで？
すたすたと自室へと退散していく十夏の背中を見送ることしか出来なかった。

十夏に断られた大会当日。
私は何故十夏があんなに無関心であったのかに気が付いてしまった。
全て私のせいだと。
一夏がいなくなって十夏も辛い思いをしていたことに気が付いていたはずなんだ。
それなのに自分だけが辛いなどと悲劇を勝手に演じていたのだ。一人よがりの演劇に助演もなにもいなかったのを知らずに。
くだらない小さな願いで立ち直った私は力を求めた。十夏を失いたくないがために。
だから気がつかなかった。私が強さしか見ていないせいで十夏の心が私から離れていったのを。
十夏を守るなら少しでも話をする時間を作れば良かっただけなのに。
ほんの少しでも十夏を気にかけてやれば良かっただけなのに。
過去に戻りたいと思った。時間が巻き戻せればと思った。
後悔の念を抱えたままに、私は優勝するしかなかったんだ。

騒動を退けて１（前書き）

唐突ですが、頂いた感想に返信をしていませんがありがたく読ませてもらっています。
戦いは苦手です。

騒動を退けて１

観ている人間と言うのは都合の良い立場にいると思う。誰もが傍観を決め込んで第三者面をしている。喜んで観ているが、自らが責められそうになるとすぐに逃げ出せるように完全に腰をおろしてはいない。
良いよな、観ているだけの人間は。

無機質な空間で俺と箒は待っている。何を待っているのかはもう忘れた。きっとどうでも良い物を待っているからなのだろう。
静寂を貫くこの場所は隣に佇む箒の呼吸音が良く聞こえるほどだ。
たぶん箒の方も俺の呼吸音が聞こえていることだろう。

「帰ってお茶でも飲んでゆっくりしたいな」

感情もなくただ発しただけの言葉はこの静けさの中で大きく響き渡った。

どうしてこの場で待たされている理由を思い出した。
闘わされるために待っているんだ。
あの小うるさい女が押し付けてきた決闘をさせられるために。
もちろん自身の肉体で闘うのではない。
ＩＳと呼ばれるパワードスーツを纏っての闘い。
子供同士の銃や刃物を使った闘い。
そのくだらない決闘に使うＩＳが来るのを待たされているんだ。

「……遅いな」

腕を組んで目を閉じている箒がポツリと呟いた。

確かに遅い。いつまで待たせるものか。

そろそろ帰っても良いだろうと動きだそうとした時、バタバタと騒がしい音が聴こえてきた。その騒音は次第に大きくなっていき、静寂を消し去った。

「織斑くん織斑くん織斑くん！！」

勢い良く現れたのは肩で息をしている山田先生。
その後ろから織斑先生が現れた。
もう少し遅く来てくれていれば良かったのにな。

「き、来ました！！　織斑くんのＩＳが！！」

呼吸を整えた山田先生が嬉しそうに言う。子供みたいだ。
山田先生の声に呼応するようにピット搬入口から白い塊が出てきた。
この白いＩＳが俺の使う物らしい。
その場を動かないままＩＳを眺める。
日常生活の何処でこんなものを使うのだろう？　無駄に幅を取って邪魔になる。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。でなければ負けるぞ」

時間がないか。それはそちらのミスであって此方のミスではない。
フォーマットとフィッティングを済ませなければ負ける。別に負けても構わない。あっちもただ弱い者イジメをしたいだけなのだから。
それに無理矢理の闘いに戦意なんて生まれない。

ともかく体を動かす。

ＩＳを装着すれば俺の体格に合わせて勝手に修正してくれる。
視界が広がり空間を余すことなく見渡すことが出来るようになる。
――気持ち悪い。
「十夏、気分は悪くないな」
俺の顔を覗き込むようにして確認をしてくる織斑先生。
後ろの方では箒がムッとしたような顔をしていて、心なしか手を力一杯に握り締めている気がする。
そんな箒は暫く行動を起こさなかったが、一回深呼吸をすると織斑先生を押しのけるようにして俺の前を陣取る。
「信じている」
……ただそれだけ。ただそれだけの言葉。
箒は俺を信じてくれるらしい。
俺が勝利を掴み取ることでも敗北を叩きつけられることでもない。
ただ、信じているだけ。
俺は頷いてからゆっくりとゲートに向かった。

「あら、逃げずに来ましたね」
これが空を飛ぶと言う感覚なのだろうか？
「最後のチャンスをあげますわ」
昔から人は青空を自由に飛び回る鳥を見て空を渇望したのだろう？

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理――」

だから人は渇きを潤すために翼を造り出した。重くて冷たい翼を。

「――って、聞いていますの！？」

何をそんなに怒っているのだろう。そんなに自身の話が優先されると思っているのか。

巨大なライフルの砲口を此方に合わせて怒る様はいつか人を殺してしまうんじゃないかと想像させてくれる。

このような危険人物にＩＳなど持たせて良いものなのか？　国は何処を見ていたのだろう。

いや、どうでも良いか。

「良いですわ。そのような態度でいたことを後悔させてあげますわ！！」

ＩＳからの警告音が響き、次の瞬間に右肩の装甲を抉った。右腕が全体に今まで受けたことのない痛みが走った。

撃たれた衝撃は姿勢を大きく崩して、先ほどまで浮いていた場所から離れてそのまま重力の意思に従って墜ちていく。

地面に激突する前に姿勢制御をこなして空中で制止した。

様々な情報が頭の中に表示されていくがそれらに目を向けることはしない。

空を見上げるとちょうど良く雨が降ってきた。レーザーの雨が的確に。局地的な人工の雨が。

「もう一度チャンスをあげますわ」
空高くから聴こえてくる声。圧倒的な優位を自覚した者の態度。
「今此処で泣いて謝ると言うのなら許してあげないこともなくってよ」
確かにチャンスだと思う。慈悲だな。
それにしても、そちらから仕掛けてきたはずだ。何故此方が謝罪しなくてはならないのだろう？
相手の素晴らしい考え方に疑問を浮べているとＩＳからフォーマットとフィッティングが完了したと報告がきた。そして現れる確認ボタン。何も考えずに押す。
ぼんやりと光り、ぼろぼろに成り果てた装甲を再構成していく。
「ま、まさか……今まで初期設定のままで闘っていたと言うの！？」
再構成された装甲は全体的に少々鋭くなっていた。
どうやら俺専用のＩＳに変化したようだ。
ＩＳの世界でずっと行きたい希望などないと言うのに。
風景や敵の行動を理解して報告してくるＩＳは俺の思いなど知らぬ存ぜずとさらに変化を起こす。
装甲の至る所がスライドして装甲に隠された部分を晒す。剥き出しになった部分から緑色の粒子が勢いよく噴出して装甲や俺の髪の色を同じ色に染め上げる。
装甲と髪の色が緑色に塗装され終わると粒子の噴出が止まった。気が付くとシールドエネルギーが大幅に減っていた。

「色が……変わったからなんだと言うの！！」

空から降って来るレーザー。
寸分の狂いもなく向かってくるそれは、俺に命中すると鏡に反射するように曲がってあらぬ方向へと飛んでいった。

「な！？」

驚愕が響く。確実に命中したレーザーが突然曲がっていったことに。
命中したようだがシールドエネルギーの減少はない。
これが俗に言う無敵状態なのだろう。実は強いＩＳなんだな。
レーザーが降り注ぐ中でのんきに景色を楽しむ余裕があるとは、けっこう便利な能力だ。
レーザーの雨は相手のエネルギー切れになるまで続いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1290y/

ＩＳ　裏方の赤い人

2011年11月17日03時06分発行